



弘大農学生命科学部 同窓会会報

第29号

平成23年6月 発行
発行 弘前大学農学生命科学部同窓会
TEL 0172-36-2111
FAX 0172-39-3750
振替 02340-7-564
印刷 (株) 笹 軽 印刷



農学生命科学部同窓の皆さんへ

東日本大震災被災学生ご支援に志を！

学部後援会との連携で

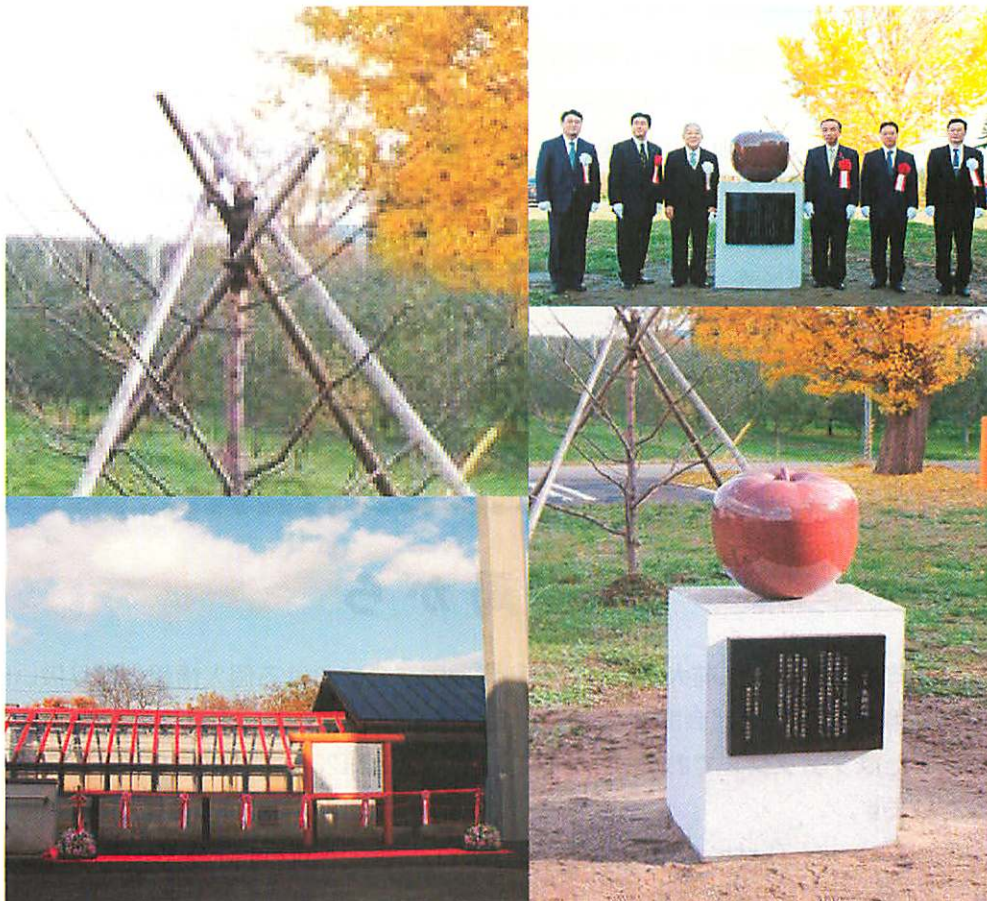
同窓会長 三 上

たつみ
異

想像を絶する未曾有の大震災

6,380余名の同窓・OBの皆さん、いかがお過ごしですか。

それにいたしましても皆さん、「地震・雷・火事・〇〇」なる日本の古諺に、今改めて想いを巡らされるような、正に「想像を絶する悪夢のような未曾有の大震災」が発生した3月11日から、お



ふじのふるさと記念広場開園

よそ2ヶ月が経過した5月13日に私はこの稿を興しております。

5月12日現在の警察庁取りまとめの余震をも含む被災者数は「死亡：14,998人」「行方不明：9,761人」「避難：114,675人」とのこと。今を去る16年前の神戸市を中心とした「阪神淡路大震災」の死亡者数6,434人という一瞬にしてこれほどの多数の尊い生命を奪い去る地震の恐ろしさとともに、この世の悲運・無常さを思わずにはいられなかったのは、一人私だけではなかったのではないのでしょうか。

それがどうでしょうか。このたびの東日本大震災は、地震に加え津波、そして原発事故がもたらした被災状況は、阪神淡路に比して、死者にして2.3倍、行方不明者を含めたおよそ2万5000名にしては4倍に何々とするこの惨状に、掛ける言葉をも失うほどの激甚な悲惨な状況であります。

学部関係被災学生は30余名

弘前大学では、このたびの大震災による被災学生への支援策として国及び日本学生支援機構奨学金からの支援策に加え、大学独自の支援策として学長裁量経費5,000万円により入学料・授業料の免除や生活支援費として新入生上限20万円、2年次以上上限15万円の給付等を一早く打ち出し5月13日までに申込みを受付したところ、大学全体で130余名からの申込みがなされ、このうち農学生命科学部学生は31名であったとのことであ

ります。

続投・鈴木学部長主導のもとに

このような状況のもと農学生命科学部では、2期目の学部長続投となった鈴木裕之学部長主導のもとに本件に関する「学部緊急対策委員会」を設置し、PTA的組織である「学部後援会（会長：櫛引利貞氏、平成11年度創設）」の支援により①実家が被災した学生への勉学支援経費として10万円（無利子）を貸与。②被災学生が後援会会員の場合は、貸与とは別に3万円を給付する支援策を実施することを決定いたしました。

学部後援会が上記のような支援策を決定するに当たって、学部同窓会との連携・協働方について協議の場がもたれ、同窓会としても後援会共々、被災学生への支援に当たることといたしました。

ご支援の志は会費納入督励&・or 1口千円以上の義損寄付で

学部同窓会として、このたびの支援対策の財源措置としては当面、予備費の一部充当により対応する方向で、7月9日開催の総会に諮ることにしておりますが、被災学生への支援対策をより強固なものにさせていただくためにも、同窓・OBの皆様方には会費の納入&・or 1口千円以上の義損寄付をしていただきますよう、衷心より謹んでお願い申し上げます。

事務局から

平成17-18年度総会で「弘前大学農学生命科学部同窓会における個人情報の取り扱いについて」が制定されました。支部会開催などで、会員情報が必要な際には「同窓生情報活用依頼書」を郵送またはファックスでお送り下さい。様式は会報第23号（2005年6月1日発行）の10ページにあります。

同窓会ホームページ（<http://nature.cc.hirosaki-u.ac.jp/dosokai/>）からもダウンロードできます。



新たな学部・研究科の教育をおし 大震災の復興を目指す

農学生命科学部長 鈴木 裕 之

前報では、教職員が一丸となって農学生命科学部の管理運営と教育・研究の活性化に取り組んでいる状況について報告いたしました。今回は、平成24年度開設を目指した大学院の改組計画について、その特徴を紹介いたします。

弘前大学農学生命科学部は「生物学科を有する農学系の学部」という特徴を前面に出すべく、平成20年度に4学科から5学科に改組しました。生物学科、分子生命科学科、生物資源学科、園芸農学科、地域環境工学科から構成されています。そして、学年進行により平成23年度末には第1期生が卒業することとなります。この時期を見計らい、現在、新しい大学院修士課程の改組計画を策定中です。

新しい大学院は1専攻5コース制とする予定です。すなわち、各専攻分野を統合して「農学生命科学」という一つの専攻のもとに、学科に対応する5コースを置き、隣接的な領域、学際的な領域の学修を促そうとするものです。コース制を導入する主な理由は、学生の専門科目に留まらず、コースを横断してその隣接科目を教育プログラムの中で学習させることです。

さらに、就職にも有利な講義を望むとの声も寄せられており、多様な進学希望に対応するために「学術研究プログラム」と「実践研究プログラム」を設定します。前者は研究者養成型、後者は技術者養成型のプログラムで、学生は入学時の何れかのプログラムを選択することになります。また、選択科目の多くは1単位科目とし、修了要件の限られた単位数内で‘より広く’専門科目を選択できるように工夫しております。

学部の5学科では専門基礎教育を重視して教育の実質化を目指しており、今回の改組はこれに連

結する修士課程を整備するものです。新しい大学院ではそれぞれの専門分野において6年間の一貫教育により専門教育プログラムの実現を図ることになります。勉学意欲を持った学生が新しい大学院農学生命科学研究科への進学を目指してくれることを期待するものです。

上記のような改組計画をもとに、昨年来、文部科学省との事前相談の回を重ねながら、改組計画（案）の最終段階を迎えた3月11日に東日本大震災に見舞われました。その後も東北地方太平洋沿岸地域は頻りに地震に見舞われており、また福島第一原発の事故も加わり、国難とも呼べる大変な状況になっております。この一連の大災害により亡くなられた多数の方々のご冥福を祈り、謹んでお悔やみ申しあげますとともに、罹災された皆様に心よりお見舞い申しあげます。

弘前大学農学生命科学部教員一同は、未曾有の大災害に対して学術がどこまで有効に貢献できるかを今後真剣に考えていかなければなりません。被災地の復旧・復興に積極的に関わっていく有為な人材を輩出していくのは勿論ですが、今、大学は何をすべきなのかが問われているのだと思います。大学における学術と同窓生の皆様の実践力・応用力とが連携して復興計画を進めるのも一つの手段であろうとも考えます。これが弘前大学の大学力であり、それを発揮するのが大学の使命であると考えております。ここで紹介した新しい大学院の教育プログラムがその一助になることを祈念するものです。また、同窓生の皆様との多様な連携が実現することを切にお願いし、ご挨拶とさせていただきます。

新学科通信

2008年4月から、わが農学生命科学部は“生物学から農学、経済、工学まで多彩な視点を身につける”ことができる新しい5学科体制に移行しました。3月に旧4学科の学生の多くを送り出し、新年度は新学科の1年生から4年生が揃ってスタートしました。そこで、新学科の学生の気質や雰囲気の一端を、教員から同窓生の皆さんに紹介して頂くことにしました。

生物学科

学科長 福澤雅志

新学科体制がスタートして、学生のほとんどが生物学科として入学してきた学生になりました。第一期生が現4年生ですので、今年度は新学科として初めての卒業生を送り出すこととなります。

生物学科は大きく分けて基礎生物学コース、生態環境コースの二分野で構成されています。教育の特色として白神山地をフィールドとした野外実習などの体験型授業が充実していることは、生物を学びたい学生にとって魅力的なものとなっています。また、8月に行われる臨海実習では、深浦町にある弘前大学の施設や浅虫にある東北大の臨海実験所を利用して4泊5日のスケジュールで行われ、学生にはとても人気があります。このように、身近に豊かな自然があることは生物学科にとっては大きなメリットです。

私は旧生物機能科学科から生物学科に移行したのですが、新学科となってから卒業研究を3年次から開始できるようになり、学生も研究に没頭できる時間が十分取れるようになりました。とくに

生態環境コースの研究には、春から冬まで一年を通じて教育研究を行うことが重要になります。また、早期に研究室に所属して教員とコミュニケーションをとることで学生の個人指導もしやすくなるし、学生も研究室愛が生じていい関係が築けるようになったと思います。

生物学科の学生の雰囲気は、旧生物機能科学科からみるとずいぶん変わったという印象を受けます。入学したての学生が受講する基礎ゼミで、志望動機を聞いてみるとほとんどの学生が動物、昆虫に興味がある（かわいい、というペット的な考え方も含め）と答え、どちらかという基礎生物学よりも生態学を志望する学生が多いことが特筆されます。これは生物学科、という名前の印象が学生にそのように映るのか、環境問題が騒がれたことで、環境生態学に興味をもつ学生が増えたことなどに関係があるかもしれません。しかしながら、現4年生、現3年生の研究室所属後をみますと、基礎生物学に興味を持って研究したいという

学生もいます。学部教育で、高校とちがう専門教育を受けるうちに、生物学を多様な視点で見られるようになってきているのだと思います。

基礎生物学の分野は近年めざましく高度化されてきており、細分化された結果、なかなか対象としている生物そのものがみえてこないといった状態になっていますが、生物学科はやはり生



物からスタートすべきであるという観点から、基礎生物学コースと生態環境コースをめざす学生とともに学ぶ環境というのは大切だと思います。基礎生物学コースの教員は、ここ1年ほどであたらしい教員が3名着任する予定ですので、教育研究

の活性化がおおいに期待できます。学科としても引き続き学生がまなぶ環境整備に努力していきたいと思います。後援会におかれましても、かわらぬご支援をよろしくお願い致します。

分子生命科学科

学科長 石 黒 誠 一

分子生命科学科は、生命現象を細胞レベル、遺伝子レベル、物質レベルで解明するうえで必要な基礎を修得する学科として設置され、生命科学コースと応用生命コースの2コースがあります。生命科学コースは有機化学、生化学・分子生物学・細胞生物学を中心とした生命科学の基礎教育を重視し、生命科学の最先端を切り開いていくことのできる能力を育てることを目的としています。一方、応用生命コースは、生化学・分子生物学を中心に、微生物や酵素関連の教育を重視し、バイオテクノロジーの最先端を取り扱い、生命現象の解明を新しい技術へと応用していく能力を育成することを目的としています。全体として、基礎的な学問分野と応用的な学問分野がはっきりと分かれて、学生にとってわかりやすくなったようです。

昨年度の新入生に自己紹介をしてもらったところ、学生の出身地は北海道（14人）が多くなり、青森県（13人）とほぼ同数で、合わせて全体の約70%になっています。数年前に北海道の高校訪問をした時に進路指導の教員の方に伺ったところ、最近では、自分のやりたいことをやるために四国に行くことも勧めるような時代になってきたと仰ってました。今の学生は遠くてもネットで調べて、行きたいところに行くということです。弘前大学のホームページのアクセス数が全国トップクラスであることが示しているように、分子生命科学科も何か魅力のある学科に変わってきて、北海道の学生が多くなってきたのかも知れません。

最近の学生の行動でちょっと気になったところは、基礎ゼミナールなどの講義の欠席が多いこと



です。ただ、学科で行っているソフトボール大会やバスでの研修旅行の出席は良いようなので、自由気ままな学生気質が昔に戻っただけなのでしょう。昨年の6月12日（土）に開かれたソフトボール大会&懇親会は、学生と教員あわせて100人以上が参加する学科の一大行事でした。普段、話をする機会のない学年の違う学生が集まるので、研究室所属に関する情報などを大量に仕入れる絶好の機会となっていました。

昨年度のバス研修旅行は、7月17日（土）に八甲田のロープウエイに乗って田茂谷地を散策してきました。宮入一夫教授、吉田孝教授、殿内暁夫准教授と私が参加し、皆さん大変明るい雰囲気楽しんでいました（写真）。



生物資源学科

学科長 戸羽 隆 宏

本年3月11日に発生した東日本大震災で、実家が大きな被害を受けた学生が当学科にもおります。被災なされた同窓生の皆様もお在りかと存じます。心からお見舞い申し上げますとともに、状況が改善し、平穏な日々が早く訪れますようお願いしております。

本学部が4学科から5学科に改組したのに伴い、その1学科として当生物資源学科も発足しました。教員は13名です。当学科の教育と研究は「生命科学の基礎から応用まで」を目指しております。これは、当学科が旧3学科と1施設から移った、多様な教員から構成されていることで実現できたものと思っております。

当学科の学生定員は35名です。初年度の平成20年度に入学した学生が、この4月に4年生となり、いよいよ新学科で初めての卒業研究が始まりました。これまでの経験では、卒業研究を進める過程で、1～3年次まで講義室で接しているだけでは判らなかった学生さんの素顔が見えてきます。

ところが、昨今の就職活動の長期化のため、夏季休業直前までは専ら就職活動という学生さんも多く、今年度は大震災の影響で授業開始が約1カ月遅れたことも加わり、研究室は、例年に比べて少し静かな新学期を迎えています。生物資源学科の学生気質を感じることができるのは、卒業研究が本格化する秋以降になるかも知れません。

そこで、ごく大雑把な印象を述べることにします。当学科の学生さんは明るく素直で勤勉です。

女子学生（当学科では、1、3および4年次の学生では4割が、2年次の学生では7割が女子学生です）も目的意識をしっかりと持って勉学に励んでいます。男子学生は、学科行事を行う際に率先して行動を起こしてくれます。当学科は前述のように基礎と応用の両方を学んで貰う学科ですが、実学志向の学生さんが多いようです（基礎科目や論理的な思考が苦手?）。また、3年生までの段階では、文章術や話し方の技術をもっと伸ばしてあげられそうな学生さんもいます。ただこれらは、当学科だけの特徴なのか、いわゆるゆとり教育世代に共通することなのかは判りません。これまでの経験では、卒業研究を通して学生さんは苦手な所を克服して、大いに成長します。生物資源学科の一期生の本領発揮が楽しみです。



生物資源学科学生実験：学内圃場での土壌のサンプリング

園芸農学科

学科長 澁谷 長 生

東日本大震災後のために園芸農学科の
研究の進展が期待される

はじめに

東日本大震災の影響に対し大学は、そして園芸

農学科は何が出来るのか、そのことが頭から離れない。青森県は八戸市周辺が津波被害を受けながらも、岩手、宮城、福島の惨状と比べると落ち着いた雰囲気であるはあるが、教員も学生も心が落ち着かない日々を送っている。通常より1ヶ月遅

れの4月末、1年生、2、3、4年生へのガイダンスにおいては学生やその家族の被害状況の確認と大学による被害学生への支援対策の説明、そして東日本大震災についての我々の受け止め方などを学生に示してきた。大震災後の先行きについて明確に我々が示せない理由は言うまでもなく福島原発の行方が混沌としているからである。



放射能風評被害との戦い

福島原発事故により、多方面に影響が出ている。その一つが放射能に対する風評被害である。それは海外が深刻のようである。日本からの輸出品特に農林水産品や食品に対しては様々な規制を世界中の国が設定している。

青森県産農林水産品の主力品であるりんごやナマコなどは現在輸出最盛期を外れているので直接的な影響は聞こえないが、今後じわじわと影響が広がると考えられる。

例えば中国国内の全国紙である「中国東方新聞」4月18日付記事では日本産農林水産品の中国輸入で次のように指摘している。

「中国側では日本の12都県に対し食品の輸入制限を行う同時に、それ以外の日本食品の輸入の際には必ず放射能の検査証明書を提出しなければならないとしている。しかし日本側は未だにこのような証明書を発行する組織がない」

つまり現在中国が必要としている日本政府から

証明書が発行されていないために、中国向けの食品はほとんど日本から輸出されていない状態だということである。

しかしこれらの動きは輸出品の問題としてだけ捉えるわけには行かない。今後国内消費の場合にも放射能検査が問題となることは間違いない。従来の農業技術の問題や農業経営・流通の問題に加え放射能汚染との戦いが農業問題の大きな焦点となる。例えば輸出減少の対策のみならず放射能検査体制、放射能汚染をさけるための農林水産物の輸送体制、また風評被害に対する安全性のPR体制などである。果樹、野菜・花卉、作物、畜産のどの分野にも対応策が求められる。また流通や農業経営、バイオマスの各分野での研究も進めなければならない。園芸農学科全体が放射能問題・並びに大震災後に対するの研究に取り組むことが望まれている。

地域環境工学科

学科長 檜 垣 大 助

地域環境工学科は、2007年度までの地域環境科学科の教育第1コース（地域環境工学・計画学）、同第2コース（地域資源経営学）のうち、前者が1つの学科となったもので、学生定員は30名、今年度に初の卒業生が誕生することになります。

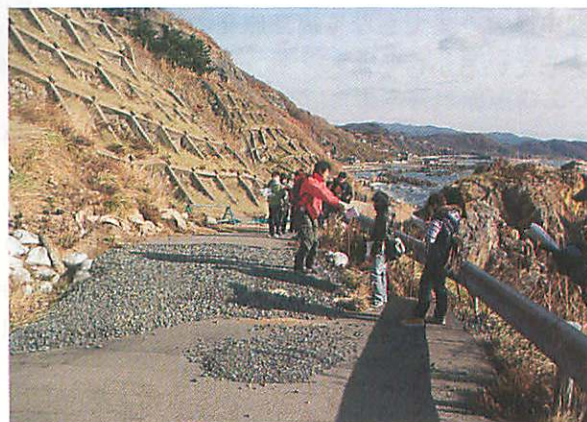
当学科は、工学の目から見た“地域づくり”と農学の目から見た“地域環境の整備・保全”を考える本学で唯一の土木系の学科となっています。

教育カリキュラムでは、農業土木コースと農山村環境コースの2つからなり、3年生になった時点でどちらかを選択することになっています。農業土木コースは、実践的な農業土木技術者の育成を目指すもので、日本技術者教育認定機構（JABEE）の認定を受けたプログラムであるため、修了時には、技術士の第1次試験が免除される修習技術者の資格が与えられます。農山村環境

コースは、農業土木を基礎としながら地域の生態系や社会・経済など広い視野で将来の農村・山間地の環境を考えることのできる人材を育てるものです。

弘前は、りんご・米の産地である津軽平野の南端に位置し、世界自然遺産にも登録されている白神山地や岩木山に車で1時間ほどで達せられる自然環境に恵まれた所にあります。このような立地条件を活かして、当学科では、座学だけでなく実験や実習・卒業研究さらに津軽平野の農業基盤施設の見学会など、専門分野を実践的にフィールドで学ぶ機会を多く作っているのが特徴です。また、講義・研究だけでなく進路や身の上相談まで時として酒を酌み交わしながら話し合う機会が多く、教員と学生との距離が近いのも特徴です。学生は、全国から来ており、違った環境で育ってきた学生が、講義・実習やサークル活動などを通じて友人を作り、豊かな風土・文化の息づく弘前の地にいることで豊かな人間性を身につけていきます。

現学科を卒業する学生の進路はこれからですが、地域環境科学科時代の第1コース出身者は、国家・地方公務員、建設業界やサービス業さらに大学院進学など多彩で、現在の就職活動の状況からこの特徴は続くと思われます。



現地で学べることと場所が豊富にある
—津軽半島での地すべり災害調査

泉 完教授、学術賞受賞を祝す！

2010年8月31日より神戸市で開催された農業農村工学会（2007年名称変更、旧農業土木学会）大会講演会の開会式において、本学部地域環境工学科（農業水利学研究室）の泉 完^{いずみ まつたし}教授が農業農村工学会最高の賞である学術賞を受賞されました。

旧農業土木学会は、忠犬ハチ公の飼い主で知られております上野英三郎先生等の努力により1907年に設立された「耕地整理研究会」を母体とし、1929年農業土木の高等教育機関の成立を基盤として発足したものです。本学会に学術賞が設けられたのは1956年からで、第1回目の受賞者は「水文学の権威である金子 良先生」であり、その後の受賞者も農業生産基盤や農村生活基盤の整備、地域環境や生態系への配慮等、数多くの業績を残し

た世界的研究者の方々であります。本学会賞は、青森県はもとより東北地方での個人で受賞されたケースは、現在岩手大学で学長をされております藤井克己先生のみです。



泉先生の受賞対象となった研究は「魚道の水理特性と魚の遡上遊泳行動に関する一連の研究」です。この研究の発端は泉先生が学生の頃、篠邊三郎先生が実験室脇で、ベニヤ板で造った温水路の実験水路を用いて魚の遡上実験を行って以来、農業水利学研究室で継続して行ってきた研究テーマでした。篠邊先生御退官の後には川越信清先生、そ

して泉先生と引き継がれ、特に泉先生は地域の河川をフィールドとして、各種魚道の機能・構造別水理特性と魚類等の遡上形態との関係を明らかにし、魚道の機能・構造的評価方法を提案してきました。その成果は学会発行の「頭首工の魚道設計指針」や「魚道を対象としたシミュレーション数値解析」との整合性にも引用され、高く評価されています。さらに実態調査から現場河川でのモデル実験「通称：スタミナトンネル」と命名した実験装置を用いた魚の突進速度の測定、水中カメラでの魚道内の遊泳行動観察、3次元流速計による魚道内の水理特性解明等々、色々な工夫を施して「魚類が遡上、降下しやすい魚道設計」をめざ

して調査・研究を行ってきました。その成果が今回の受賞につながったものと思われます。

泉先生は1978年弘前大学農学部農業工学科を卒業され、研究科の途中より秋田県立農業短期大学に奉職されましたが、1994年母校弘前大学に助手として着任され、助教授を経て、2007年教授に昇進されております。従いまして、本同窓会の正会員であり、今回の受賞は同窓生にとっても大きな喜びであり、かつ励みでもあります。先生本当におめでとうございました。そして、更なるご活躍を期待しております。

(文責：1972年農業水利学研究室卒 工藤 明)



ふじのふるさと記念広場開園(藤崎農場) および 弘大アップルビーフ特別生産牛舎竣工(金木農場) について

生物共生教育研究センター長 石川 隆二

生物共生教育研究センター藤崎農場は旧農林省園芸試験場東北支場の跡地に建てられました。昭和36年に盛岡市に移転されるまでの23年間、当地に園芸試験場東北支場があり、このガラス温室を利用してこの地において果樹や野菜の品種改良、栽培改善、栄養生理、病虫害防除に関する様々

な試験研究が実施されました。その中でも特段輝かしい研究業績が、現在世界一の栽培面積を誇るリンゴ品種「ふじ」の育成であります。一部の職員は引き継ぎ事項の伝達のために、支場にも勤務していたそうです。その支場において利用されていたガラス温室ならびに支場にて育成されたふじ

を記念した行事が昨年11月にとりおこなわれました。本部事務職員も総出となり、農場職員と共に記念行事を無事に終えることができました。

この発端は2009年になります。本学は藤崎町からガラス室保存の要望を受けました。しかし、昨年までは老朽化が激しく、屋根のトタン板はさび付き、ガラスは割れ落ち、多くの窓は開閉できない状態でした。そこで、出来る限り原形を維持することを基本にしつつ、学長裁量経費にて修復工事を行いました。その周囲を広場としてセンター開放の際に一般の方の憩いの広場にしてみようというのが趣旨です。また、この行事に先立ち職員への聞き取りから、本学技術職員が、「ふじ」原木の場所を鮮明に記憶しておりました。その場所は根の観察に利用していたライシメーターの脇でありました。そのことが明らかとなり、当時の写真も見つけられたことからその場所近くに看板を設置しました。ご来訪の折りにごらんいただければ幸いです。広場に植樹されたリンゴ樹は、「ふじ」原木の株分け樹です。この樹は藤崎町役場前に植えられていたものを分譲していただき、「ふじ」の原木が種子から誕生した1940年から70周年の節目の年に農場に植樹されることになりました。近くにはふじのふるさと記念広場に彩りを添えるオブジェも建立されました。石碑前面のプレートには、「リンゴ品種 ふじ は、1940年、この場所において、農林省園芸試験場東北支場の育種試験により、国光 と デリシャス の交配種子から誕生した。生誕70周年をむかえ、世界一の栽培面積を誇る ふじ 育成の偉業を讃え、この地でのリンゴ研究とリンゴ産業の発展を祈って記念碑を建立する。」と刻まれています。今後この記念碑に日夜接することになる私共も、この地でのリンゴ研究に邁進し、リンゴ産業のお役に立てるよう、日夜努力する所存です。藤崎町には、ガラス室保存の要請を受けて以来、広場脇イチョウの木の下に12台分の立派な駐車場を作って頂いたのを始め、株分け樹の移植、案内看板の設置に際して、多大なるご支援、ご協力を頂きました。改めて厚く御礼申し上げます。

一方、金木農場には学長裁量経費にて弘大アップルビーフ特別生産牛舎が2011年3月に完成しました。金木農場は畜産、稲作の複合経営のモデル農場として位置づけられて、畜産部門では乳牛を主に飼育しておりました。弘大に長くつとめられてきた関係者は弘大牛乳を懐かしく思われる方もいらっしゃると思います。その後、1982年から肉用牛の肥育を行っておりましたが、つなぎ牛床ということもあり、肥育単房の施設充実が必要でありました。また、トウモロコシサイレージからの出発でありました。金木農場に長く在任された村山先生の頃から、りんご絞りかすの有効利用による「自己完結循環型農業のためのシミュレーション農場」が検討され、稲作堆肥や畜産への利用研究が始まりました。その後、豊川元学部長、村山先生の研究をもとに、鈴木学部長、松崎先生、房先生など畜産関係の教員のご尽力により、弘大アップルビーフも農場祭での人気商品となっていきました。その成果により大学内の予算措置としてブランド牛肉増産体制の整備ということで、弘大アップルビーフの増産安定供給に必要な肥育牛舎新設が認められて今日に至りました。本施設では16房の肥育牛房が備えられ、特性の循環型飼料、現在ではりんご絞りかすを利用した飼料が保管できるスペースもあります。少人数での肥育体制を可能にするためにフロントローダーも設置されることになりました。大学側のエネルギー供給のモデル計画の一環として、太陽光パネルの設置も進められることになっており、今後、これらの施設を利用したデータ収集と解析、畜産部門への応用がすすむことが検討されております。

このように生物共生教育研究センターの両農場は、ますます地域の方と一体となって地元の要望に答える研究活動に邁進することになります。みなさまにもより一層のご支援いただけますようお願い申し上げます。



平成22年度学位記伝達式

東日本大震災で被災された方々の苦難を想って、今年度の学位記授与式および卒業・修了の祝賀行事は中止となりました。しかしながら、母校を巣立つ卒業生・修了生に挨拶の言葉を贈りたいとの学長のつよ
い要望で、学位記伝達式が平成23年3月23日に弘前大学創立50周年記念会館みちのくホールで行われまし
た。今年度の卒業生は、学部卒175名、修士修了55名でした。



地域環境科学科卒業生



大学院修士課程卒業生



生物生産科学科卒業生



生物機能科学科卒業生



応用生命工学科卒業生

研究科、学科ごとに撮影した写真に不具合がありました。お詫びいたしますとともに、上記の写真のファイルを同窓会のホームページ (<http://nature.cc.hirosaki-u.ac.jp/dosokai/>) から自由にダウンロードできるように、写真屋さんにご了解して頂きました。ご利用下さい。

厳しさを増す就職戦線と 同窓会・同窓生の皆様へ就職支援に係るお願い

准教授 石塚 哉 史 (学部就職支援委員)

同窓会会員並びに関係者の皆様におかれましては、平素より農学生命科学部・農学生命科学研究科の教育・研究活動にご協力いただき厚くお礼申し上げます。

3月11日に発生した東北地方太平洋沖地震により、被災された皆様に心よりお見舞い申し上げます。昨今の新聞・テレビの報道によると、今回の震災が日本企業の国内外での業務に大きな影響を与えており、それに伴い今年度の新規求人も大手・中小企業を問わず例年よりも低い倍率となる可能性が高いといわれているところです。仮にこの事態となれば過去3ヵ年連続で低下している大卒求人倍率(平成20年度2.14、同21年度1.62、同22年度1.28)が更なる低下を示し、今年度卒業見込みの学生・院生による就職環境が悪化する可能性が高くなるのが危惧されます。こうした動向から、先般文部科学大臣及び厚生労働大臣の連名により、主要経済団体の長宛に「平成23年東北地方太平洋沖地震により被害を受けた新卒者等への配慮に関する要請書」が発出され、来春卒業予定者の採用への協力要請が記載されている点をご承知のことと存じます。

このような最近の厳しい就職状況を踏まえ、本学部・本研究科では昨年度から所属学生による就職活動に関連するサポート体制の強化を目的として就職支援委員会を設置し、学部独自による企業説明会やOB・OG交流会、学生への就職活動への意識調査等を企画・立案しております。このたび、上述した未曾有の事態を鑑みて、同窓会関係者の皆様へ会報の紙幅をお借りして「本学部・本研究科における昨年度の就職状況のご報告並びに今年度就職支援に係るお願い」を述べさせていただきます。

本学部・本研究科の平成22年度就職内定状況(平成23年5月1日現在)は、学部95.0%、研究科95.3%と昨年度の厳しい就職戦線にありながらも教職員や同窓会関係者のご協力により90%強の高い比率を保つことができました。しかしながら、前年と比較すると学部では3.2ポイント上昇しているものの、その一方で研究科においては2.5ポイント減少しており、昨今の厳しい就職戦線の波が本研究科に対しても届きつつあることが理解できます(平成21年度：学部91.6%、研究科97.8%)。

さて、本学部・本研究科では、5学科・4課程を有した農学系学部・研究科として専門領域を学ぶことのできる教育体制の充実を図っております。このような取組により、卒業生の皆様と同様に農業関連業界、官公庁をはじめ様々な分野で活躍できるような人材を社会へ送り出すことを目指しております。しかしながら、昨今の低下傾向を示している新卒求人倍率の中では本学部・本研究科による支援活動のみでは、万全な体制とは言い難く限界があるのも事実です。

以上の点を踏まえ、就職支援委員会としては、農学生命科学部の所属学生が、在学中に身につけた知識及び技術を卒業後に社会においてその能力を十分に発揮できるよう、より一層支援体制の強化に努めていきたいと考えております。

つきましては、震災後の慌ただしい事態であることは重々承知しておりますが、同窓会関係者の皆様には、従前同様に本学部・本研究科の所属学生への就職活動の支援として各種求人等関連する情報等についてご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

最後に、同窓会会員各位の益々のご健勝とご多幸を祈念致します。

平成22年度卒業生・修了生の就職・進学先

本年度の卒業・修了生の就職先および進学先は以下の通りである（括弧内に数字を記入した場合以外は各1名である）。

生物機能科学科（卒業生数39人）

㈱シイエヌエス、㈱ダイナム、㈱ホープ、㈱みちのく銀行、(独)青森県産業技術センター、(福)岩手県社会福祉協議会、インターファーム㈱、ヤンマー農機販売㈱東日本カンパニー、山形県商工会連合会、道東あさひ農業協同組合、日新製菓㈱、農中情報システム㈱、地方公務員(5)、弘前大学大学院(14)、東北大学大学院(2)、筑波大学大学院、東京大学大学院、大阪大学大学院、奈良先端科学技術大学院大学

応用生命工学科（卒業生数48人）

㈱サカタのタネ、㈱シジシージャパン、㈱スズキ自販青森、㈱ペアレン醸造所、㈱荘内銀行、㈱中央コンタクト、㈱北陸電機商会、JA 全農青果センター㈱、イニシオフーズ㈱、シノブフーズ㈱、マネックス証券㈱、花王プロフェッショナル・サービス㈱、会津ゼネラルホールディングス㈱、岩手ふるさと農業協同組合、山崎製パン㈱、仙台コカ・コーラボトリング㈱、鶴見製紙㈱、地方公務員(3)、公立学校教員、弘前大学大学院(14)、筑波大学大学院、東京大学大学院、慶應義塾大学大学院

生物生産科学科（卒業生数52人）

自営(農業)(4)、㈱朝日会館(2)、㈱ドンドンアップ、㈱大木家、(有)テック、(有)モルト、グラントマト㈱、下越農業共済組合、岩手缶詰㈱、久光製菓㈱、紅屋商事㈱、国立大学法人岩手大学、国立大学法人弘前大学、青い森信用金庫、全国農業協同組合連合会長野県本部、津軽みらい農業協同組合、東京サラヤ㈱、東北化学薬品㈱、美里町物

産観光協会、北良㈱、地方公務員(3)、公立学校教員（川崎市）、私立学校教員、弘前大学大学院(18)、東北大学大学院

地域環境科学科（卒業生数33人、うち23名はJABEEプログラムの卒業生）

東日本旅客鉄道㈱(3)、(学)北里研究所、㈱NEXCO エンジニアリング新潟、㈱クローバー、㈱サンワドー、㈱セイコーマート、アークランドサカモト㈱、ショーボンド建設㈱、建設塗装工業㈱、元気寿司㈱、秋田県土地改良事業団体連合会、青森県信用組合、青森沢井薬品㈱、大東建託㈱、津軽保健生活協同組合、日本たばこ産業㈱、国家公務員、地方公務員(7)、公立学校教員(2)、弘前大学大学院(2)

大学院農学生命科学研究科（修了者数55人）

(財)材料科学技術振興財団、(財)食品環境検査協会、(財)日本冷凍食品検査協会、JA 新いわて、青森県産業技術センター、朝日食品工業㈱、イニシオフーズ㈱、エンカレッジ・テクノロジー㈱、大谷産婦人科不妊センター、㈱イーピーメイト、㈱カイノス、㈱ケミクレア、㈱ジェイエイ・エルピーガス情報センター、㈱ジャパンファーム、㈱リクルートドクターズキャリア、関東化学㈱、公立学校教員(2)、国立大学法人東北大学、国立大学法人弘前大学(3)、ゼリア新薬工業㈱、タムラデリカ㈱、地方公務員(7)、つがる弘前農業協同組合、東北化学薬品㈱、東北グリーントーミナル㈱、日油㈱、東日本旅客鉄道㈱(3)、ブルーオーシャン㈱、ボイスインターナショナル㈱、湯沢市中央土地改良区、リーフス㈱、ワダカン㈱

一部、卒業生の皆様に、「弘前大学同窓名鑑」作成のための調査カードが届いているようですが、この名鑑作成に当同窓会ならびに弘前大学同窓会は関わっておりません。

新任教員の自己紹介



姜 東 鎮 准教授（生物共生教育研究センター）

2010年7月1日に農学生命科学部附属生物共生教育研究センターに着任しました。韓国大邱（デグ）広域市出身。韓国慶北大学卒業後、東京大学大学院農学生命科学研究科で修士・博士号を取得しました。専門は作物学。卒業後、東京都立大学、韓国慶北大学、日本大学21世紀

COE 研究プログラム（兼任：タイ王国海外拠点常駐研究員）、国際イネ研究所、宮崎大学などで、環境ストレスに対する耐性遺伝資源の探索や耐性機構の解析に関する研究に取り組んできました。これまでの経験を生かし、東北地方から作物学研究の新たな情報発信を目指して頑張るつもりです。よろしくお願いします。



遠 藤 明 助教（地域環境工学科）

はじめまして。私は、岩手大学大学院を修了後、各省庁所管研究機関のポスドク、民間企業の会社員、農業高校や短大の教員を経て、平成23年4月に農学生命科学部に着任しました。これまで、農地工学や土壌物理学の分野において、農地土壌の水分・栄養塩類濃度・熱物性の同時計測法の開

発、農耕地土壌中の無機態窒素移動・窒素循環に関する数理モデルの開発等に從事してまいりました。学生諸氏に対しましては、授業やゼミ等を通じ、農耕地等の土地資源や地域環境を守ることの尊さを伝え、農業土木や環境保全に携わる技術者として社会で活躍できるようサポートしてまいりたいと考えています。今後とも、ご指導、ご鞭撻の程宜しくお願いたします。

教職員人事

退 職

（定年退職）

なし

（辞職）

松岡 教理（まつおか のりまさ）

准教授（生物学科）平成22年11月15日

採 用

（新任）

姜 東鎮（カン ドンジン）

准教授（金木農場）平成22年7月1日

遠藤 明（えんどう あきら）

助教（地域環境工学科）平成23年4月16日

（昇任）

福澤 雅志（ふくざわ まさし）

教授（生物学科）平成22年11月1日

加藤 幸（かとう こう）

准教授（地域環境工学科）平成22年11月1日

（特任）

村山 成治（むらやま せいじ）

特任教授（金木農場）平成22年4月～8月

会費納入と住所通知のお願い

平成23-24年度会費5,000円を、同封致しました振込用紙でお納め下さいますようお願い致します。転勤や転居で住所が変更になりましたら、事務局までご一報下さい。

同窓会事務局

〒036-8561 弘前市文京町3 弘前大学農学生命科学部同窓会

工藤 明 電話 0172-39-3842 (FAX 兼用) E-mail akudo@cc.hirosaki-u.ac.jp

松崎 正敏 電話 0172-39-3804 E-mail mma@cc.hirosaki-u.ac.jp

田中 和明 電話 0172-39-3816 E-mail k-tanaka@cc.hirosaki-u.ac.jp

同窓会総会開催のお知らせ

平成23-24年度総会を下記の通り開催いたしますので、ご案内申し上げます。

記

日 時 平成23年7月9日(土) 午後3時~4時

場 所 030-0812 青森市堤町1丁目1-23 ホテル青森

電 話 017-775-4007

- 議 題
- 1 平成21-22年度事業報告
 - 2 平成21-22年度会計報告
 - 3 平成23-24年度事業計画
 - 4 平成23-24年度予算
 - 5 平成23-24年度役員
 - 6 その他

なお、総会終了後に懇親会(会費3,000円)を行います。準備の都合がございますので、ご出席いただける会員は、6月29日までに事務局にご一報下さいますようお願いいたします。

事務局担当者 松崎正敏 電話 0172-39-3804 E-mail mma@cc.hirosaki-u.ac.jp

東日本大震災被災学生の支援にご協力を!!

今回の東日本大震災で被災した本学部学生に対しまして、同窓会では、会長の挨拶にもありましたように学部および後援会とともに支援を行うことに致しました。つきましては会費の納入とともに、1口1,000円で募金をお願いいたします。ご協力よろしくをお願いいたします。

支部だより

山形支部“弘山会”総会開催

弘前大学農学部・農学生命科学部同窓会「山形県支部」（通称弘山会）の総会が平成23年2月19日（土）鶴岡市湯野浜温泉の「ホテル都屋」で開催されました。大学からは支部からの要望がありました宮入一夫先生と事務局から総務幹事の工藤明が出席致しました。支部長の大竹俊博氏（昭和36年土壤肥料卒）の若々しい開会の挨拶に始まり、次期総会は3年後の平成26年に開催することが決定されました。さらに事務局への要望として「支部総会の開催通信費を本部事務局で負担してもらえないか」とのご意見があり、総会に諮ることを約束しました。その後の懇親会では宮入先生から学内の状況と今日の学生生活の様子をパ

ワーポイントで説明され、参加者は自分の学生生活と重ね合わせて懐かしく聞いておりました。工藤からは同窓会への協力に感謝の言葉を述べさせて頂き、就職等の状況をお話させて頂きました。その後はすごい、山形県パワーで夜明け一歩手前まで盛り上がりました。

今回の幹事役は山形県庄内総合支庁に勤務されております柴田三郎氏（昭和56年農地工学卒）、野仲学氏（平成元年生物化学卒）、板垣健太郎氏（平成11年蔬菜花卉卒）のお三方でした。本当にご苦労さまでした。今回は参加者が10名とやや寂しい感じがしましたが、次回も宜しく願い致します。（文責：事務局 工藤 明）



訃報

青木次郎先生（元教授、果樹園芸学）
 菊池卓郎先生（元教授、果樹園芸学）
 斉藤善一先生（元教授、農産物利用学）
 中村信吾先生（元教授、農産物利用学）
 進藤悦郎氏（農業水利S47年卒）

上記の会員のご逝去の報が届きました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

最新の情報は同窓会ホームページでご覧下さい (<http://nature.cc.hirosaki-u.ac.jp/dosokai/>)